



お話しいただけますか。

芝井—1886(明治19)年に大阪のお寺で始まった法律学校がそもそものスタートです。明治初期にはたぐさんの「お雇い外国人」と呼ばれる人たちが来日し、その一人フランス人のボアンナードはフランス法を教えるために来た人でした。やがて彼のお弟子さんたちが日本の司法を担っていくわけですが、そのお弟子さんたちが大阪に来たときに、ここにも法律学校を開こうということで、児島惟謙ら司法関係者が中心になって始まりました。ですから法政大学、明治大学と関西大学は兄弟校といわれます。いずれもボアンナードのお弟子さんが始めた学校ということですね。

岸—千里山キャンパスに移ったのは大正時代でしたね。

芝井—1922(大正11)年にここに移転してきました。ですからあと3年で100周年になります。そのときに移転

うな感じですか。そうすることで、講義で習ったことが身体に染み付いたのではないのでしょうか。今はカリキュラムも増えていますが、それでも外に調査に出るなどしてできるだけ実習的な授業を増やそうにしています。芝井先生から「学の実化」のお話もあったように、まさに実際に体験して身につけることが関大の建築学科の目指すところなのかな、と思います。

岸—個人的にはいかがでしょう。

西澤—私はよく学生に「古典は常に新しい」と言うのですが、先人や古い建物に対するリスペクトを忘れないでほしいと思っています。関西には古い建物が数多く残っていて、法隆寺の五重



総合資格学院が立ち上げ当初から支援してきた「建築新人戦」が昨年10周年を迎えた。写真は、公開審査日に行われた記念イベントでのトークセッションの様子。建築新人戦2018を記録したオフィシャルブックも3月末に刊行されている

の中心になったのが山岡順太郎という人で、彼は「学の実化」ということを提唱しました。学理と実際の調和ということですね。大阪の学校ですから、かたちだけ、言葉だけではなく、実質を大事にする気風はもとよりあったんですが、山岡はさらにこれを公開講座の開催など、具体的に推し進めていきました。私は、この「学の実化」とは社会に開かれていくことだと考えています。先生も学生も、実際の社会との接点をできるだけ広範囲にもつこと、学外との関係をきちんともって研究や教育ができること、それが大切だと。アカデミズムは大切ですが、それが閉じた途端に腐ってしまいます。開かれていて初めて健全なアカデミズムが育つのではないのでしょうか。

岸—ありがとうございます。次に環境都市工学部建築学科について、西澤さんからお願います。

西澤—私はまだこちらに来て10年ちょっとなんですが、建築学科は1昨年に50周年を迎えました。創設時の資料などを見ると、そうそうたる先生方がかかわっていらして、なかには国立大学を飛び出して立ち上げに加わった方もいらつしやいます。ある意味、建築教育の理想の場をつくらうとしていたのではないのでしょうか。

塔に代表されるように、千何百年も前の人たちがものすごくハイテクなことをやっています。それを謙虚に学ぶ姿勢を忘れないでほしいんです。時代がどんなに変わっても、地球の上で、重力や自然のなかで建物をつくる以上、やはり土や木を見る必要があります。

学生たちが実際に社会と接するチャンスをつくってほしい

岸—関西大学ご出身のたくさんの方が、卒業後に総合資格に通って1級建築士に合格されています。また、それに留まらず総合資格では、卒業設計展や各種コンペなど学生への支援なども行っていますが、それらについて何かお考えのことはありますか。

西澤—卒業設計については、必死にやるのはよいことですが、私から見ると少し根を詰めすぎている気がします。徹夜続きで身体を壊したのでは本末転倒です。健康第一をまず考えてほしい。それから、貧乏学生だった私から見ると、ちよつとお金をかけすぎではないかな、と。今でも経済的に余裕のない学生はいるので、なにかもつと共通のルールのなかでやったほうがいいのかな、という気がします。小学校の遠足のとき、お菓子はいくらまでと決めるように(笑)。見栄えは質素になる

岸—西澤さんは京大でも、また他大学でも教えていらつしやいました。関大の建築学科はどんなところが違いますか。

西澤—まず雰囲気。カラッといていて、先生たちがみんな言いたいことを言える空気がある。学生も、下を向いて歩いている人がいない。移ってきたばかりのころは、そんなことにびっくりしました。それは草創期の気風が生きていることに加えて、キャンパスの環境が大きいのかな、と思いますね。

岸—学生の特徴みたいなものはありますか。

西澤—親が建築関係の仕事をしている人が多いのではないかと思います。工務店や設計事務所などの2代目、3代目の人たちは、かなり明確な意思をもっている。だから、学生どうしでもすぐ刺激し合える関係ができていくように思えます。

岸—関大は校友会がかなりしつかりしていて、自分の子どもも関大に入学させたいというOBが多いですね。

歴史に学ぶ謙虚な姿勢を忘れないでほしい

岸—西澤さんは、なぜ建築の道に進もうと思ったのですか。

西澤—よく聞かれるんですが、分からないというのが正直なところなんです。実

かもしれないんですが、そのなかに1つでも2つでもきらりと光るものがあれば、それでいいのではないのでしょうか。

岸—支援という意味で、なにかご希望やお考えはありますか。

西澤—関大の1年生は、入学すると授業で毎年春に豊中の日本民家集落博物館に行きますし、犬山の明治村に行く人も多いです。1年生なので、見るだけで得られるものは少ないにしても、それがきっかけになっていろいろなものを見るようになってほしいということですね。それと同じように、たとえば東京の大学と協力して、東京の学生たちが関西に来たらこちらの学生が大学のキャンパスを含めて関西の建築を



は消極的で、おもしろい話ではないんですよ。

岸—小さいころにあの建築を見て憧れた、というような話はないのですか。

西澤—私も岸さんとほぼ同世代ですから、小さいころはまだ終戦直後の空気が残っていて、爆撃で焼け野原だったところにぼつと建物が建ち始めた時期です。そういう現場に行つて遊んだりしていましたから、建設現場での経験はなにかしら影響があったのかもしれないですね。

岸—では質問を変えて、今は学生を指導する立場におられるわけですが、関大の建築学科ではどのように学生を指導しているか、また西澤さん個人として考えていることなどを聞かせてください。

西澤—先ほど建築学科草創期の話をしましたが、そのころはともて多くの実験や実習がありました。午前中、座学があつて、午後はずっと実験をやるよ

案内する。こちらが東京に行ったら、向こうの学生たちが東京の建築を案内してくれる、そういう交流ができると、もつといろいろなものを学生に見せることができます。そういうときの交通費の援助などがあれば、学生にとってはありがたいですよ。

岸—なるほど。

西澤—ただ経済的な支援より、私は学生がいろいろな経験をする機会をつくってもらふことのほうが重要ではないかと思っています。いまでもマンシヨンの耐震化などを大学として引き受けて、その調査研究に学生を参加させているんですが、そういう経験は本人の自信にもなるし、人とのつながりも生まれ、誇りや責任感もたせてくれます。そういう機会をもつと増やしてもらえたらありがたいですね。

岸—支援はお金だけではないということですね。就職支援として、私たちもいろいろな企業の実態を紹介したり、企業と学生のマッチングをししたりして、できるだけミスマッチが起らないような取り組みも行っています。そういう企業とのつながりを生かして、就職以前の連携についても、私たちにできることをいろいろと考えてみたいと思います。本日はありがとうございました。